左右ポピュリズムの共通起源―ニューレフト運動の考察から

アンダーランド　ジェイク　#1A193008-2 73組

問題提起：

　1950年代以降、新たな左翼イデオロギーの確立を目的とするニューレフト運動が先進国の間で流行をみた。本論文では水島治郎が『ポピュリズムとは何か−民主主義の敵か、改革の希望か』（２０１６年、中公新書）の中で提示するポピュリズムの定義を援用し、それに則ってニューレフト運動をポピュリズム運動として捉え、分析する。具体的には、ポピュリズムにおける「人民」の概念を中心に論じ、ニューレフト運動が新たな「人民」を措定し、その代表者を自認して既存のエスタブリッシュメントを批判する運動であると解釈する。その過程で、近年興隆している右翼ポピュリズムとニューレフトの左翼ポピュリズムの類似性を挙げ、この二つの対立するイデオロギーに基づくポピュリズムが共通の起源を持っているという仮説を提示する。この際、ピッパ・ノリスの「文化的反発説」(cultural backlash theory, Pippa Norris and Ronald Inglehart, 2016) により左右両翼のポピュリズムを説明することができることを議論の要に置く。この論文により導き出される結論は、次の２点である。（１）ニューレフト運動はポピュリズム運動である。（２）左右ポピュリズムが「文化的反発」（Norris and Inglehart, 2016）に根ざす共通の起源を持っているという仮説は、アメリカのニューレフト運動と右翼ポピュリズムに関しては支持される。

　右翼のポピュリズムはこれまで幾度となく指摘されてきた。しかし、左翼の側にも同じようなポピュリズムが働いており、それが建設的な協議の妨げとなっていることは、そこまで言われてこなかった。なぜなら、そもそも多様性を尊重する左翼のイデオロギーでもポピュリズムに特徴的な集団への帰属意識と他集団への攻撃的姿勢が芽生えることが可能であるとあまり考えられてこなかったためであろう。しかし、左翼の側にもポピュリズムが潜んでいるのが現実である。この先、左右両翼の間で建設的な協議を可能とするためには、右翼ポピュリズムのみならず、左翼ポピュリズムも超克することが必要であろう。この論文は、その第一歩として左翼ポピュリズムの認識を促すことを目的に書かれた。本論文を読むことが、左翼の側にあるポピュリズムの認識に少しでも資することができたら幸いである。

目次：

はじめに

1. ニューレフトとは
   1. 思想
   2. ポピュリズムとしてのニューレフト
2. アメリカでのニューレフト運動の展開
3. 「文化的反発」と左右ポピュリズムの共通性
   1. 置き去りにされた旧支配層と「文化的反発」
      1. 社会的地位の低下とその反動
      2. 右翼の「文化的反発」
      3. 左翼の「文化的反発」

おわりに

内容のまとめ：

はじめに – 本論文の二つの目的の明示：(1) ニューレフトはポピュリズムであることを証明する。(2)ニューレフトの左翼ポピュリズムの起源が右翼ポピュリズムと同じ「文化的反発」に認められることを示す。

1. ニューレフトとは – ニューレフトの定義と、数あるニューレフト運動の根本的な思想に潜むポピュリズム的要素について記述。特にニューレフトとポピュリズムが共通に掲げる「人民」に議論の的を絞る。ここから、ニューレフトはポピュリズムであると結論づける。
2. アメリカでのニューレフト運動の展開 – アメリカで展開されたニューレフト運動の一部を詳しく追って、それがどうポピュリズムの運動であったか具体的な分析を加える。
3. 「文化的反発」と左右ポピュリズムの共通性 -現代アメリカに見られるような右翼ポピュリズムもニューレフト運動の左翼ポピュリズムも「文化的反発」の結果として説明する。  
   　「右翼ポピュリズムでは人々が自分の属する集団の社会的地位の低下に不安を抱え、その集団への帰属意識を強めて他の集団を攻撃し、自集団の優位を主張する。つまり、右翼ポピュリズムにおける『人民』は最初から一貫して自分の属していた社会集団なのである。対して、ニューレフトの左翼ポピュリズムでは自分の属する社会集団の社会的地位の低下に不安を抱いた人々が、逆に自分の集団を批判してそこから離れ、外部集団の味方に入って新たな集団を作る。つまり、ニューレフトのポピュリズムにおける『人民』は自分の社会集団ではなく、それに批判する諸集団を言う。そのため、ニューレフトのポピュリストは自分の社会集団を批判する外部集団に加わることで批判を逃れ、そこに自分の属する新たな『人民』を見出し、帰属意識を強めて安定を図るのである。」（本論文より抜粋）

　おわりに – 論文の二つの目的を再確認し、左右両側におけるポピュリズムの克服の必要性を強調する。

参考文献（一部）：

Debord, Guy. 1967. *The society of the spectacle*. New York: Zone Books.

Marcuse, Herbert. 1964. *One dimensional man.* Boston: Beacon Press.

Norris, Pippa and Ronald F. Inglehart, 2016, “Trump, Brexit, and the Rise of Populism: Economic have-nots and cultural backlash” (RWP16-026). Retrieved from HKS Faculty Research Working Paper Series, June 17, 2019. Harvard Kennedy School.

大嶽秀夫2007『新左翼の遺産』東京大学出版会

ホーン川嶋瑶子2018『アメリカの社会変革―人種・移民・ジェンダー・LGBT』ちくま新書

水島治郎2016『ポピュリズムとは何か−民主主義の敵か、改革の希望か』中公新書。

水島治郎2017「『ハイブリッド型』としてのアメリカ？―グローバル・ポピュリズムの中の現代アメリカ政治」『生活経済政策』242（2017.3）、13-17頁